

ペテロの手紙第二章「偽教師らの滅び」

1A 正しくない者たちへの処罰 1-9

1B 忍び込む偽教師 1-3

2B さばきの日 4-9

2A 汚れた欲望 10-22

1B 権威の侮り 10-12

2B 不義の報酬 13-18

3A 欲の奴隷 19-22

本文

第二ペテロ 2 章を開いてください。1 章で語られていたことを思い起します。ペテロは、自分自身が間もなくローマによって死刑に処せられることを知っていました。これまで、使徒たちがイエス・キリストによって、教会の土台作りをしました。それぞれが、その土台から各自が主にあって動いていくことによって、家を建てていきます。しかし、その土台をどんな材料で建てるのかは、私たちが注意していないといけません。ペテロは、この手紙を読む信者たちに、自分が教えたことを思い起こそうとさせていました。しっかりと思い起こし、それで純粋な思いを奮い立たせることが私たちの務めです。「これは聞いている、これは知っている」としているところに危険が入り込みます。2 章では、教会の中に忍び込む偽教師のことを、ペテロは警告します。

1A 正しくない者たちへの処罰 1-9

1B 忍び込む偽教師 1-3

¹ しかし、御民の中には偽預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れます。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込むようになります。自分たちを買い取ってくださった主さえも否定し、自分たちの身に速やかな滅びを招くのです。

ペテロは、彼らに、キリストの力と来臨の真実を思い起こさせました。それは作り話ではなく、彼自身が、高い山でイエスが栄光の輝きの姿に変えられたのを目撃しました。そして、何よりも預言のみことばがあり、それは確かであると言ったのです。それで、暗き世を照らす灯としていなさい、明けの明星であるキリストが来られるまで、そのようにしておきなさいと話しました。そして、一つ注意を与えました。預言は、自分勝手な解釈ではなく、聖霊に動かされた人によって書かれたのだということです。ですから、自分勝手に解釈するという危険があるのですが、見事にそれをしていく者たちが現れるということでもあります。

「御民の中には偽預言者も出ました。」と言っています。イスラエルの民に、まじない師であるバ

ラムがイスラエルを呪うおうとしたところから、偽預言者の姿が現れます。モーセは、最後の説教、申命記で、偽預言者について警告しました。「13:1-5 あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現れ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、2 あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう」と言っても、3 その預言者、夢見る者のことばに聞き従ってはならない。あなたがたの神、【主】は、あなたがたが心を尽くし、いのちを尽くして、本当にあなたがたの神、【主】を愛しているかどうかを知ろうとして、あなたがたを試みておられるからである。4 あなたがたの神、【主】に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。5 その預言者あるいは夢見る者は殺されなければならない。なぜならその人は、あなたがたをエジプトの地から導き出して奴隷の家から贖い出された、あなたがたの神、【主】に対して、あなたがたが反逆するようにそそのかし、あなたがたの神、【主】が歩めと命じた道から、あなたを迷わせようとするからである。あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」

事実、イスラエル人やユダヤ人たちの間から、数多く出てきました。アハブ王の前で、アラム王と戦って勝つことができると、多くの預言者が預言していたのですが、唯一、ミカヤという預言者が、アハブの命が必ず取られることを預言しました(1列王 22 章)。バビロンが、エルサレムに迫って来つつあるエルサレムは、熾烈な預言者の戦いがありました。ユダヤ人に罪があり、彼らが悔い改めなければバビロンによって滅ぼされるという預言を行なったのは、エレミヤと僅かな預言者のみでありました。他の預言者は、「【主】のことば——。わたしがバビロンの王のくびきを砕くからだ。(28:4)」と、すぐにでもバビロンから解放されることを話していました。

イエスは、宣教の初期から偽預言者の存在を語っておられました。山上の説教の最後は、偽預言者についての警告です。「マタイ 7:15 偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。」そしてこのような者たちは、イエス様の名によって預言をし、悪霊を追い出すことさえします。けれども、主は、「7:23 わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。」と言われます。

そして、この者たちが、「滅びをもたらす異端をひそかに持ち込む」と言っています。「異端」とは、元々の意味は「選択する」ということらしいです。主によって選ばれるのではなく、自分で勝手に選び取るという意味合いがあるのでしょうか。そして、派生して「分派」という意味があります。私たちが使徒たちの教えに従い、イエス・キリストを主としてあがめている中に、分裂をもたらすように仕向けていきます。「ローマ 16:17-18 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまづきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。」異端の始まりは、主イエス・キリストにあって一つになっている交わりに、自分自身に人々が仕えてほしいために分裂を引き

起こすところから始まります。

そして「ひそかに」持ち込むのです。そのような人たちは、真理を語っています。けれども、真理と共に何か他の意図も付け加えています。いつの間にか、偽物を忍び込ませています。自分の欲に仕えるように、真理を語りながら、また異質なものを付け加えながら話し、ついには真理に真っ向から反することを信じるように惑わします。

そこで、「自分たちを買い取ってくださった主さえも否定し」とあるのです。私たちが今、ここにいるのは、主が私たちをご自分の流された血によって買い取ってくださったからです。しかし、心の定まらない人、弱い人が、そのような者たちの惑わしによって、その言葉を信じていき、結果として主を真っ向から否定するようなことを言わせたり、やらせたりします。主に従っているのであれば、到底、そんなことはできないということを行なわせていきます。

私は、自分自身が異端の教えを、新しく信じた時に聞いてしまった苦い経験があります。その時に、キリストの十字架の場面を聖書で読みました。そこで、「あなたが神の子ならば、十字架から降りて来てもらおうではないか。」と罵った者たちの言葉に、同意してしまっている自分がいたのです。そんな弱い救世主であれば、信じないほうがよい。救世主が十字架に付けられるなど、そんなこと失敗に違いないと思っていたのです。激しく、悔い改めました。

ゆえに、「自分たちの身に速やかな滅びを招く」ということになるのです。十字架によってのみ、復活によってのみ、その福音によってのみ、私たちは滅びから免れます。けれども、それを否定するので、自分の身に滅びを招いてしまうのです。ペテロが手紙を書いた時は、これは霊的な滅びのみならず、肉体的な滅びも含まれているようです。淫行を行わせて滅びを招いていることが考えられます。後半部分に、姦淫を彼らが行わせていくことが書かれているからです。

²また、多くの者が彼らの放縦に倣い、彼らのせいで真理の道が悪く言われることとなります。

「彼らのせいで真理の道が悪く言われる」これが、とても辛いことです。イエスの御名によって行っていること、真理のことが、一部の偽預言者らの行っていることによって、悪く言われるのです。キリストの御名によってどれだけ良いことを行っても、その一部によって打ち消されて行きます。

³ 彼らは貪欲で、うまくこしらえた話であなたがたを食物にします。彼らに対するさばきは昔から怠りなく行われていて、彼らの滅びが遅くなることはありません。

先に読んだ、ロマ 16 章には、分裂を引き起こす者たちには、「私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。」とありました。どんなに滑らかな言葉を使っても、その根っこ

には、貪欲があります。自分に注目を引き寄せたいというのがあるでしょう。そして、自分にお金が集まるように仕向けます。時には、人々を騙すことによって巨額の金を得ることさえあります。

そして、「うまくこしらえた話であなたがたを食物にします」とあります。私たちは、だまされないと思っている時が最も危ない、とよく言われます。キリスト教ではありませんが、ある有名な女優さんが、挿み屋によって洗脳されて、5億円が取られたという話を見ました。恐ろしくなりました、キリスト教会も、下手をすると、同じような洗脳の手法が使われてしまうのではないかと思いました。そして、ペテロはここで、実にこれが教会で起こっていること、しかも、使徒たちが生きている時代に起こっていたのです。

こんなに、とんでもないことが起こっていて、私たちにはどうしようもないと思いますが、しかし、主は怠りのない裁きを下されます。怠りのない裁きだけでなく、滅びが遅くなることはないと言っています。私たちは、神の裁きは遅いと思います。けれども、遅くなることはないのです。

2B さばきの日 4-9

そしてペテロは、昔、起こった神の裁きを三つ取り上げます。

⁴ 神は、罪を犯した御使いたちを放置せず、地獄に投げ入れ、暗闇の縄目につないで、さばきの日まで閉じ込められました。

これは、すべての歴史の中で、最も激しい、大きな事件であったと思います。神が、神々とまで呼ばれる、ご自身に仕える者たちを造られました。御使いたちです。しかし、その中で罪を犯した者たちがいたのです。その筆頭が後にサタンと呼ばれる者たちであって、その手下どもです。このために、今の世界が今のようになっています。神のかたちに造られた人が罪を犯すようにそそのかし、それで、悪魔が世界を支配するようになりました。世の中にいろいろな騙しがありますが、世界最大の騙しが今も継続して行われています。

しかし、神は、ご自分に仕える者たちの中から反抗した者どもを、放置することはありませんでした。「地獄に投げ入れ」た、とあります。ここは、ギリシア語で、「タルタルス」と言います。御使いが、最後の審判の時に裁かれるまで閉じ込められている穴であることが分かります。

ところで、似たような場所で、「アビス」があります。底知れぬ所です。そこにも、悪霊どもが閉じ込められるところなのですが、アビスのほうは、時には、解き放たれて、主がその墮落した天使どもをご自分のために使われることがあります。黙示録 9 章にある、いなごのような存在で、さそりのような毒を持っていた存在が、そうでした。そして、悪魔自身が、イエスの再臨後、底知れぬ所に千年間、鎖で縛られていて、それから解き放たれます。イエスが、レギオンという悪霊に対峙さ

れた時、彼らは底知れぬ所に行けとお命じにならないように懇願しています(ルカ 8:31)。

午前礼拝でお話しましたが、この時点ではまだ、閉じ込めているだけで、最終的な裁きの日を待っているだけです。タルタルスやアビスのような獄屋に入れられて、それからゲヘナ、火と硫黄の池に投げ込まれます。

⁵ また、かつての世界を放置せず、不敬虔な者たちの世界に洪水をもたらし、義を宣べ伝えたノアたち八人を保護されました。

次は、ノアの時代に、洪水で裁かれた者たちであります。「不敬虔な者たち」とあります。人々が悪に思いが傾き、世界は暴虐に満ちていました。彼らが、思い図ることは悪だけになっていたことが、創世記に書かれています。

しかし、ノアは正しい人でした。創世記には、神の恵みに見出されていて、それで義と認められています。ヘブル 11 章では、彼は信仰によって義と認められていることが書かれています。ノアが、箱舟を造るように命じられ、それを信じ、そのまま行ったからです。そして、創世記には書かれていませんが「義を宣べ伝えた」とあります。その間、主の言葉、主の義をそこにいる人々に宣べ伝えていました。彼らは箱舟の中にいることによって、保護されます。正しい者は救われ、不敬虔な者は滅びるという原則です。

⁶ また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、不敬虔な者たちに起こることの事例とされました。⁷ そして、不道徳な者たちの放縦なふるまいによって悩まされていた正しい人、ロトを救い出されました。⁸ この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。⁹ 主はこのようにされたのですから、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるのです。

三つ目の神の容赦ない裁きは、ソドムとゴモラの町を主が火によって焼き尽くしたことです。ここが午前礼拝でじっくりと学びましたので、ぜひ聞いてください。

ノアの家族の救いとロトの家族の救いには、若干の違いがあります。どちらも正しくされた人たちが救われていますが、前者は、洪水の中で保護されて救われます。後者は、その裁きの町から逃れることによって救われています。後者の救いは、教会の救いです。今の世から取り去られることによって救われます。しかし、前者の救いは神の御怒りの中を通過して、それでも守られて救われます。これは、終わりの日にイスラエルが試みを受けて、その中で残された者のために主が来られるという、預言が数多くあります。大患難は、教会にとっては御怒りから救われるものですが、イスラエルの民にとっては、試みを受け、主に立ち返り、救われるために用いられます。

2A 汚れた欲望 10-22

そして、これら偽教師がいかに、汚れた欲望に満たされていたのかを、ペテロは糾弾します。

1B 権威の侮り 10-12

¹⁰特に、汚れた欲望のまま肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対して、主はそうされます。この者たちは厚かましく、わがままで、栄光ある人たちをののしって恐れません。

偽教師たちのすることは、まず権威を侮ることです。これまで与えられている従来の権威があります。国においても、社会においても、そして家族、そして教会においても権威があります。それらは、みな神から来ています。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」しかし、偽教師たちは、神に反抗しているので、これらの権威に盾突きます。教会であれば、人々の中にある不満を煽ります。時にそれは、公然と教会の秩序や指導者に対して、非難し、陰口を叩き、分派を引き起こすこともあります。そうした肉の行ないを我々人間は、生来持っています。その欲望を梃子にして、自分の地位を高めようとする者たちがいて、彼らが自分を教師だと自称します。

しかし、権威を侮り、平然と上に立つ者をそしることについて、聖書には終わりの日に、すべての神々よりも自分を高くする反キリストの存在が預言されています。「ダニエル 11:36-37 この王は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。彼は先祖の神々を心にかけて、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけて。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。」「黙示 13:5-6 この獣には、大言壮語して冒瀆のことはを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒した。」

私たちは民主主義という思想の時代に生きています。民が主であるとする考えです。また人間が一番だとする時代に生きています。人権がとても大切にされています。けれども、それはすべて神からの賜物です。神の恵みがあって人権が尊ばれるべきであり、神が必要ならば人権のない状況もお許しになられる時もあるのです。しかし、人権や民主主義が神から独り歩きして、それを偶像視しています。ヒューマニズムが、今日、最も警戒しなければいけない思想、考えでしょう。ゆえに、人間が一番だ、自分が一番だという欲望が制御されることなく、噴出している時代に生きています。テモテ第二 3 章にあるように、「自分を愛する時代」です。その世の流れを、キリスト教の装いをもって教会の中に持ってくる強い圧力があります。それを、人々に尤もらしく教えていく時に、まさにそれが偽の教えであります。

そして、「栄光ある人たちをののしって」とありますが、これは、目に見える人の存在だけでなく、

御使いのような、霊の存在のことも含みます。次をご覧ください。

¹¹ 御使いたちは勢いも力も彼らにまかっているのに、主の御前で彼らをそしって訴えたりしません。

御使いは、イエスの墓のところで、ちょっとした行動で大地震さえ起こすことができました。ダニエル書では、ペルシアの君、ギリシアの君、そしてイスラエルの君がミカエルと出て来て、国の主権者となっています。このように、主権や力が与えられています。

しかし、その御使いとて、神に反対する墮落した天使の勢力に対して、直接、ののしることをしなかったのです。それはユダの手紙に書かれています。「9 御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて悪魔と論じて言い争ったとき、ののしってさばきを宣言することはあえてせず、むしろ「主がおまえをとがめてくださるよう」と言いました。」悪魔に対してでさえ、その権威に対して直接、ののしることをしなかったのです。主ご自身が咎めてくださるようにとっています。

¹² この者たちは、本能に支配されていて、捕らえられ殺されるために生まれてきた、理性のない動物のようです。自分が知りもしないことを悪く言い、動物が減るように滅ぼされることになります。

ここで、「動物」について話しています。動物と人間の違いは、ペテロがここで言っているように「理性」です。事実や客観的情報に基づくのではなく、感情や感覚で物事を決めています。そして、その特徴は、「自分が知りもしないことをそしる」ことです。事実よりも、感じていることの方が大事なのです。そして、ペテロは彼らが滅ぶ定めにあることも話しています。

ここにおいても、今は、終わりの日の兆候が見えていると言えるでしょう。事実よりも、感情が大事にされる時代に生きているからです。感情が絶対なのです。自分の感じていることを害されることは悪であるとしている時代です。そのために、感情のコントロールが利かない人が増えています。なぜなら、神の権威が不在だからです。自分の気持ちが神のように絶対化されているからです。

2B 不義の報酬 13-18

¹³ 彼らは不義の報酬として損害を受けます。彼らは昼間から飲み騒ぐことを楽しみとしています。彼らはしみや傷であり、あなたがたと一緒に宴席に連なるとき、自分たちのだましごとにつけるのです。

ここから、偽教師たちが「放縦」を教会に持ち込んでいる姿が出てきます。その様子を見るに、おそらく、敬虔の教えではなく、肉と霊は別なのだという霊肉二元論を唱えていたのではないかと考えられます。そして、周囲の異教の慣わしを取り入れているのではないかと想像します。いや、神の名によって、一般社会以上に破廉恥なことを行っていたとも考えられます。神の名によって、貪

欲と汚れた欲情にかられると、やることは世間よりも酷くなることがあります。

やっていることは、昼間からの飲み騒ぎです。これには、泥酔だけでなく、性的な逸脱も当然含まれます。彼らのことを、「しみや傷」と言って、神の前で献げられない、いけにえの特徴を話しています。そこで、自分たちのだましごとを展開させます。

¹⁴ その目は姦淫に満ち、罪に飽くことがなく、心が定まらない人たちを誘惑し、心は貪欲で鍛えられています。彼らはのろいの子です。

そうした宴席で、相手を姦淫の目で見ています。そして、まだ心定まらない人たちを誘惑します。まだ信仰をもったばかりの人とか、信仰を堅くしていない人たちが餌食となります。その貪欲が、「鍛えられている」とまで言っています。確信的に、高度なテクニックを使っているということです。最後に、「のろいの子」と言っていますが、まじない師「バラム」のことを話します。

¹⁵ 彼らは正しい道を捨てて、さまよっています。ベオルの子バラムの道に従ったのです。バラムは不義の報酬を愛しましたが、¹⁶ 自分の不法な行いをとがめられました。口のきけないろばが人間の声で話して、この預言者の正気を失ったふるまいをやめさせたのです。

バラムはどのようなことで、不義の報酬を愛したのでしょうか？民数記を読むと、彼は、イスラエルを呪いたいバラク王によって雇われたことがわかります。はるばるユーフラテス河畔にいるバラムのところまで、死海のすぐそばのモアブから使いがやって来ました。バラクは神からイスラエルをのろってはいけぬ、と命じられていたのに、使いが持ってきた大金を見て、それでその依頼を承諾したのです。バラムのろばが、人間の声でものを語ることによって、自分が行なっている正気を失ったふるまいを知らされました。

そしてバラムは、最後はバラクに助言をします。それは、イスラエルを呪うことができなければ、彼らが呪われることを行なえばよいと。それでモアブ人の女をイスラエルの宿営に連れて行かせたのです。それは、不義の報酬を愛したからでした。けれども、イスラエル人が後に攻め入って、そこにバラムがまだいたので、彼も殺しました。不義の報酬を愛しましたが、もの見事に滅びました。これが、偽教師たちの定めでもあるのです。

¹⁷ この者たちは水がない泉、突風で吹き払われる霧です。彼らには深い闇が用意されています。

イエスからはいのちの水が湧き出ます。(ヨハネ 4:14)けれども、偽教師のことは、いのちもなにもなく、突風で吹き払われる霧のように、実体のないものです。そして深い闇、つまり地獄が用意されているだけです。地獄は福音書で、「外の暗やみ」と呼ばれています。

¹⁸ 彼らは、むなしいことを大げさに語り、迷いの中に生きている人々の間から現に逃げ出しつつある人たかを、肉欲と好色によって誘惑しています。

空しいことを大げさに語る。そして、迷いの中において、肉欲や好色からようやく逃げてきたのに、その中に再び誘惑しているという、言語道断なことを行っています。

3A 欲の奴隷 19-22

そこで彼らが語っている、空しい大げさなことには、「自由」があるでしょう。いわゆる、昔、フリーセックスと呼ばれていたものです。宗教的な制約で自分たちを閉じ込めてくるのは不自由である。自由があるのだと言ってのだとされています。そこで次のことを言います。

¹⁹ その人たちに自由を約束しながら、自分自身は滅びの奴隷となっています。人は自分を打ち負かした人の奴隷となるのです。

その教師たち自身が救われなければいけない、失われた存在なのです。性欲に対して自由になっているのではなく、奴隷になっているのです。そして滅びに向かっていきます。

²⁰ 主であり、救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れから逃れたのに、再びそれに巻き込まれて打ち負かされるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪くなります。

1 章で、イエス・キリストを知ることによって、いのちと敬虔についての神の力が与えられたと書かれていました。けれども再び世の汚れに戻ったならば、イエスを知った初めの時よりも、状態がもっと悪いものとなります。

²¹ 義の道を知っていながら、自分たちに伝えられた聖なる戒めから再び離れるよりは、義の道を知らなかったほうがよかったです。²²「犬は自分が吐いた物に戻る」、「豚は身を洗って、また泥の中を転がる」という、ことわざどおりのことが、彼らに起こっているのです。

「知る」ということには責任がともないます。知らずに行なったことは、軽いむちで済むが、知っていて行なえば、その罰はひどいということを、主ご自身がお語りになったことがあります。義の道を知らずに、例えば風俗で働いていた人がいるとします。その人がしていることに報い、というのはあるでしょう。けれども、そのようなものから主を知ることによって抜け出したのに、再びそこに戻って風俗をしたら、これほど惨めなことはありません。犬が吐いた物に戻るとか、豚が洗ったのに泥に戻るというのと同じことをしている、ということです。

そして自分の吐いた物、つまりもうすでに離れた肉欲や汚れの中に戻るということです。そしてきよめられたのに、再び汚れの中に戻るということです。清められたのに、また汚れの中にはいるという惨めな状態です。しばしば、最も惨めな人とは、「世的なキリスト者」であると言われます。教会に来れば、いつも罪を犯していることが示されて惨めな思いになる。だからといって悔い改めない。けれども世を楽しもうとしても、神を知らない人たちのように楽しめない、ということです。

私たちは、気を付けましょう。「そのままでもいいんだよ」という言葉があります。それは、今の自分のそのまますを神は受け入れてくださるということです。しかし、その無条件の愛を知った私たちは、イエス様にあって神の聖さ、正しさに触れます。そこで、自分は汚れ離れ、神に従いたいと願うのです。しかし、その変化を否定して、私たちが変えられることを、そんな言葉をいったら人の心が傷つく、愛がないなどと非難して、そのままのあなたを神が受け入れられるというのが、そのまま罪をやり続けていてもいいんだよ、という自由を約束します。その行き着く先は欲望の奴隷なのです。